

漱石「自由」への警告

Junko Higasa 2015.1.12

漱石が生きた明治時代は、国家の意向が国民を結束させていた社会から、個人の自由が急速に拡大していく時代だった。国家の方針と個人の競争が相俟って、良くも悪くも文明は発展した。その中で人の心は大きく変わる。そして殉ずるという「明治の精神」が失われて「個人の自由」が強くなった大正の初めに、漱石は『私の個人主義』という講演をする。その論旨は以下の三カ条である。

1. 自己の個性の発展を仕遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならない。
2. 自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない。
3. 自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならない。

そして同講演で、自己の意見ではなく、人の尻馬に乗ることに対しても一言を加えている。

これは漱石が懸念した未来への提言でもある。しかし 21 世紀の人類の殆どはそれに耳を貸さない。

圧迫が高じてテロが起こる。互いが「自己の自由」を主張する。尻馬に乗って暴動が起こる。人々は熱くなり客観的視点を失う。個人の自由と他人の自由の配分はなく、自分側の自由だけの主張が暴力を拡大させる。暴力の果てには社会衰退が来る。漱石には「人が自分で自分の命を削る未来」が見えていた。